

## 〈課題研究論文〉

エッガースドルファーの「自発的受容論」  
— 篠原助市の解釈をもとにして —

玉川大学教育学部  
森山賢一

## 1. エッガースドルファーの「自発的受容論」とそれに対する篠原助市の解釈

エッガースドルファー (F. X. Eggersdorfer, 1879~1958) は篠原助市 (1876~1957) の特に、「自己活動」にかかわる教育思想をはじめ、教育の本質論などを中核とした教育哲学的研究に大きな影響を与えた重要な教育学者の一人である。このことは、篠原の著作を読めば明らかである。彼は昭和14年に岩波書店から出版された著書『教育学』のなかで、教育における「発動と受動」について詳述しているが、特に教育の受容的方面について考察を行っている。その記述は次の通りである。

「近時エッガースドルファーは『発動的受動』(ただの受容ではなくて) について力説し、『最も有力な陶冶作用はいつでも発動的受容から、即ち陶冶価値への精神的な没入から期待せられる。』と述べているが、彼がここに単に発動と言はないで発動的な受容といった点特に我々の注目に値する。所謂(エッガースドルファーの陶冶) に於ける自己活動は凡てこれ受容の為の発動であり、受容に於ける集中であって、一定の目的実現に対する発動とはあくまで区別して考へられねばならぬ。」<sup>1)</sup>

さらに、『独逸教育思想史』の下巻においても、「エッゲルスドルフェルの『青年陶冶』は最近の教授論に於ける最も円熟した結実である。」<sup>2)</sup> また、彼の高著『改訂理論的教育学』においても、エッガースドルファーの「自発的受容」を引き合いに出し、教授学の在り方についての解決を求めている。

このように篠原は、エッガースドルファーの教育思想を非常に高く評価し、篠原自身の教育学の立場を明らかにしている。エッガースドルファーの教育思想の中でもとりわけ、「自発的受容」に対する篠原の関心は高く、相当エッガースドルファーの理論を取り込んでいるようである。

以上篠原自身の記述によってもわかるように彼の思想、ことに「自己活動」に関わる教育理論に大きな影響を与えたエッガースドルファーの教育思想について次に考えてみよう。

## 2. 「自発的受容論」の概念

文末に示した注の<sup>2)</sup>においてエッガースドルファーの生涯と事績について触れてみたが、彼の学習指導論の中心的著作は1928年に出版された『青少年陶冶—教授の一般理論—(Jugendbildung)』であり、彼はこの著作を三巻のうちの一巻と考えていたようである。第二巻の『青少年教育(Jugenderziehung)』は彼の没後1962年にアイロス・フィッシャーの編

集によって出版されている。さらに第3巻は、『青少年養護』といわれているが、世に出ることではなく現在に至っている。

さきの篠原助市の教育思想、特に、「自己活動」にかかわる教育学研究は、エッガースドルファーの教育思想のなかでもとりわけ、「自発的受容 (Spontane Rezeptivität)」を中心とした教育の本質に関する問題に大きく影響を受けている。このエッガースドルファーの教育思想を知る手がかりとなる著作は、彼の代表的著作である『青少年陶冶 (Jugendbildung)』である。以下に、この著書をもとにエッガースドルファーの教育思想について論じてみることにする。

エッガースドルファーはなぜ「自発的受容 (Spontane Rezeptivität)」を唱えるようになったのであろうか。自由活動を重視したガウディヒの教育思想の反省をもとに「陶冶作用は常に与えることと、取り入れること能動と受動の二重の活動である。・・・(中略)・・・自由活動としても労作は、陶冶進行の全体を包括するのではなく、他の労作と並んで授業の生動化のための一つの道を指し示しているだけである。」<sup>3)</sup>と言及している。さらに、「まだ何も置かれていない巣から鷹は決して卵を取ろうとはしない。労作方法の最高かつ最も内的な効果は、生徒から期待することはできない、期待できるとすれば、彼はもはや、生徒ではなく既に成熟に達していることになる。」<sup>4)</sup>と示されている。

我々はこのような見解から彼が「自発的受容」を導き出したことを十分に理解することができるのである。

それではエッガースドルファーのいう「自発的受容」とはどのようなものであろうか。彼はこの問題にかかわってまず「自発性 (Spontaneität)」について以下のような広義的な概念を示している。

「すべての行為に対し、自我へとさかのぼって作用する、形成的な力を与えるもの、それは人間存在の本質の核心から湧き出るものである。」<sup>5)</sup>

つまり「自発性」というものは、人間の本質から湧き出るものであり、形成的に作用するものなのである。さらにこの「自発性」を伴った活動は「最も深い内的な生動化への道」<sup>6)</sup>であると定義している。また、彼は、「活動は自発性への道であり・・・(中略)・・・自由な活動が自発性へのよりよい道である。いや自発性の一つの形でさえもある。」<sup>7)</sup>と述べている。

すなわち彼は「自発性」を上位概念としてとらえ、自己活動はそのための手段であると考えているのである。

このように彼の「自発性」に関する洞察は、深まりをみるのであるが、ここで注目すべき彼の教育学が展開されている。

彼は自発性について「能動的であるという必要は全くない。うっとりして見入ること、心を奪われてじっと聞き入れること、最高に深い体験は、自発的受容の最高の形であり、それゆえ、これらの諸形式は、また価値にあふれた陶冶作用を示している。」<sup>8)</sup>と言い、この自発的受容の例について「創造的な語りや、熱中の傾聴、自然の観察や芸術作品への洞察、日々の生動化、直観的な沈潜は、ここでは多忙な活動への没頭や自信のある話や発表よりも高く

評価される。」<sup>9)</sup>としている。

それではいかにして「自発的受容」を進めていくのが問題になってくる。ここでは、エッガースドルファーの「自発的受容」の原理についてさらに深く考察を進めたい。

エッガースドルファーによれば、「自発性受容」を原理とした教育の本質から、「陶冶財の客観的本質内容と心が出会うことの感動」<sup>10)</sup>を掲げ、このような感動こそ、「教授活動の一つ一つの陶冶力がかかっている。」<sup>11)</sup>と述べている。

つまり、この「出会い (Begegnung)」とは、ドイツ教授論の伝統的な中核思想であり、その意味するところは、対象との自由な生き生きとした全心を傾ける接触や結合であるとされている。すなわちそれは、学習者の心の底まで揺り動かされる、ゆさぶられるという「全心的理解」であると考えることができる。子どもの自由活動や手作業、生産的活動は、表にあらわれた具体的内容であって目的ではなく、それは単なる現象であり本質ではありえないものである。

このようなドイツ教育学の中核ともいえる「出会い」を重くみたエッガースドルファーの教授原理は、人間形成の核心にまで深化させようとしたものであった。彼は教授による人間の全体的陶冶の中心概念を、「陶冶の深さ、深まり」、「生命(魂)を与える(生氣化), Beseelung」によって表現し、「陶冶が正しい深さに達することこそ、陶冶の作用がめざす本質的な配慮点である。」<sup>12)</sup>、「この深さに欠ける陶冶は、我々がいう陶冶の概念に適當しない。」<sup>13)</sup>と言及しているのである。

高久清吉は著書『教授学』の中で、このようなエッガースドルファーの教授論について考察を深め、その教育目的となる人間陶冶の三要素を「生きた知識」、「魂のこもった能力」、「純化された意思の働き」をあげ、この三要素が結びつくことが陶冶なのであると解説しているのであるが<sup>14)</sup>、これはエッガースドルファーの教授論の具体的内容を明快に示しているものである。

以上のような深く、そして広がりをもった洞察によってエッガースドルファーは、教授原理の真髓を「最も強い陶冶の成果は、いつでも自発的受容または陶冶価値に対する魂のこもった生き生きとした献身から期待することができる。」<sup>15)</sup>と結論づけるのである。

### 3. 教育の本質の洞察－自己活動により自己活動へ－

篠原の教育学ことに教授学における要は、自発的受容、自己活動の極致が、つまり純粹に事物に没入する「献身的態度」である。このことを言い換えれば、「合則性(即事性) (Sachlichkeit)」を体験することに教育の本質があるとも言える。要するに、教育の目的としての自己活動が示されているのである。篠原は、この目的としての自己活動と教育目的ではなく手段としての自己活動の区別と関係づけを中心とした概念規定を行っている。この重要な視点は以下にあげた篠原自身の主張から明らかとなる。

「後なる段階が前なる段階の目的であり、前なる段階が後なる段階の手段であるといふ、精神生活に固有な、目的と手段との交互発展において、次第に純化され行くことを予想し、しか

もこの純化の根底にはいつでも『精神的』な即ち価値あるものを純粹に求める態度が存しなければならぬ。」<sup>16)</sup>

つまり手段としての「自己活動」と、教育の本質としての「自己活動」が交互的にらせんに発展を遂げる過程が「自己活動」の姿なのである。このような「自己活動」の発展の過程で、子どもに歓喜がおこり、疲労を意識することが少なくなつて、事物と子どもは一体となり献身的態度が生まれるのである。ここでは、作品から自我に与える反動こそ、本当の陶冶的、形成的価値をもつものである。

高久清吉は、著書『教育実践の原理』の中で、「自主性」の概念的的研究にかかわって、現象としての自発性と本来の自発性を区別し、これを「非自主的自発性」と「自主的自発性」と呼び、自主性の本質として「価値志向性」<sup>17)</sup>をあげている。ここでの「価値志向性」の高まりは、子どもが心の底まで揺り動かされる深いわかり方、感動によって生まれるものである。このためには子ども自身が価値あるものへ没入 (Hingabe) していく、すなわち献身的態度、言い換えれば、「自発的受容」が重要な存在となる。つまり、教育の本質というのはこのことにあるのである。

## 註

1) 我が国におけるエッガースドルファーの主たる研究について以下の論文を参考にした。

○富田竹三郎 「解説 エッガースドルファーの教授者としての教師」『青少年陶冶』翻訳本協同出版 1980 P. P. 467～485

○富田竹三郎 「解説 エッガースドルファーの教授者としての教師」『小林澄兄博士喜寿記念論文集 日本の教育のゆくえ』講談社 1966 P. P. 341～366

○K. ルーメル (Klaus Luhmer) 「F. X. エッガースドルファー —現代イデオロギーと対決するカトリック教育学者」『現代に生きる教育思想 5. ドイツⅡ』天野正治編集 ぎょうせい 1982 P. P. 391～400

2) エッガースドルファーの生涯と教育活動

エッガースドルファーは、1879年にニーダーバイエルン州のペンドルフに生まれた。村の単級国民学校に通い、1891年に神学校に入学し、そこから人文科ギムナジウムに通学した。1899年、パッサウのリツエウムにおいてのプラトンやアリストテレスをはじめとする古代ギリシャ哲学やアウグスティヌスによるキリスト教の解釈は、その後のエッガースドルファーに大きな影響を与えている。

その後ミュンヘン大学神学部の懸賞論文に応募し、受賞の栄に輝いたのは、『教育者としてのアウグスティヌス』の論文であった。1907年には、『教育者としての聖アウグスティヌスと陶冶史におけるその意義』の論文によって見事にミュンヘン大学で神学の学位を授与された。

同年には、ギウナジウムや職業学校等での宗教の講義を担当した。彼はここでヴィルマン (Otto Willman, 1839～1920) との出会いがあった。さらにドイツ改革教育学者、とりわけ労作教育の提唱者であった、ゲオルグ・ケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner, 1854～) の学校改革政策を支援したこともある。

さらにエッガースドルファーは、1909年に教授資格請求論文の「聖フランツ・フォン・ザーレスの修業とその理論的基礎」をミュンヘン大学神学部に提出し、道徳神学の教授の資格を取得し、講師に就任した。翌年には、『現代の改革教育学とキリスト教の教育的英知』ならびに『禁欲と教育』を著わしたが、ここではキリスト教の英知から改革教育学を洞察した彼の見事な教育学に対する立場が鮮明に映し出されている。

1913年～1917年にカソリックの出版社ヘルダーがヴィルマンとロローフ(Ernst M. Roloff)を編集者として、『教育学辞典』を出版したが、エッガースドルファーも労作学校(Arbeit Schule)をはじめとして宗教教育について執筆している。

1914年、第一次世界大戦の勃発によって彼は、従軍牧師(司祭)として4年間にわたり活動したため研究活動を中断したが、1918年に帰還し、その後パッサウ大学の正教授に就任した。当時の彼の教育学研究の分野は、バイエルン憲法草案の宗教上の成年(1919年)、公教要理説明の方法の動きの精神(1921年)、宗派学校の精神(1922年)、学校改革にある変わるものと価値あるもの(1924年)といった教育行政に関するものが多かったが、彼の中心的課題は、教育科学であり、1922年には「ドイツ教育科学研究所」を開設するに至った。さらに機関誌『科学的教育学季刊』の発行にも努力を傾注した。

1928年には彼の大作である『青少年陶冶—授業の一般理論—(jugendbildung)』が出版された。この著作は、エッガースドルファー自身が中心となって刊行された『教育科学全集』26巻のうちの第一巻として出版されたものである。この著作はドイツにおいてロングセラーとなり、ドイツ教育界に感銘を与え、高著ヴィルマンの『教授学』に匹敵するとさえ言われた。労作教育思想や、自発性の原理などを深く考究したのもこの著作である。

さらに1930年にはパッサウ大学学長となるが、不幸なことに、1933年当時ドイツでは、ヒトラー内閣が成立しその政権によって教授学長の職を罷免される事態となった。このため彼は司祭となったが、1945年再び大学へ戻り、学長に復職した。その後は1948年～1949年まで、バイエルンの学校改革教師教育専門委員をつとめた。

彼の大学における最終講義は、彼の教育学の神髄である「永遠の教育学」にふさわしい「宗教教育学」と題した講義であった。その後エッガースドルファーは、1957年にヴィルマンの『教授学』の第6版の「まえがき」を執筆しているが、36ページにもおよぶ「まえがき」の中で、カトリック教育学の創設者としてのヴィルマンを称え、エッガースドルファー自身がその教育思想に多大な影響を受けていることを告白している。

その翌年の1958年5月29日、エッガースドルファーは永遠の眠りについたが、1962年には、同僚のアロイス・フィッシャー(ALOIS Fischer, 1902～1962)の手によって遺稿集が『青少年教育 Jugenterziehung (1962)』として編集、出版されたのである。

#### 引用文献

- 1) 篠原助市『教育学』岩波書店 1939 P. 257
- 2) 篠原助市『独逸教育学思想史』下巻 創元社 1947 P. 453
- 3) F. X. Eggersdorfer; Jugendbildung. 5. Aufl. (1950). S. 144.

- 4) *ibid.*, S. 157.
- 5) *ibid.*, S. 146.
- 6) *ibid.*, S. 159.
- 7) *ibid.*, S. 159.
- 8) *ibid.*, S. 146.
- 9) *ibid.*, S. 152.
- 10) *ibid.*, S. 155.
- 11) *ibid.*, S. 155.
- 12) *ibid.*, S. 52.
- 13) *ibid.*, S. 52.
- 14) 高久清吉 『教授学—教科教育学の構造—』協同出版 1968 P. 125
- 15) F. X. Eggersdorfer; *Jugendbildung*. 5. Aufl. (1950). S. 161.
- 16) 篠原助市 『改訂理論的教育学』協同出版 1949 P. 410
- 17) 高久清吉 『教育実践の原理』協同出版 1970 P. P. 102~104